

# 土佐のわらべ

第409号《第431回（2015. 11. 12） 子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加5人

## 『ABC 曙第二中学校放送部』 市川朔久子／著 講談社

曙第二中学校放送部、略してABCは部員2名の廃部寸前の弱小部。軽い気持ちで中途入部したみさとはアナウンス担当。ちゃんとしたアナウンス経験も無いのに新しい顧問の須貝は、昼放送を始めたりコンクールに出ようとした。のんびりとした部活のはずが、責任重大だ。

誰からも距離をとり、いつも一人でいる転校生の美少女葉月。クールで頑として譲らないが自分の気持ちを押し込めている葉月が放送経験者と知ったみさとは部活に誘う。葉月はアドバイザーとしては協力するのだが、自分は決してマイクの前で声を出そうとしなかった。

新任教師の須貝は、一生懸命なわんこのような先生。部員獲得の為に色々提案するのだが、まだまだ教師らしくなくて、ベテラン教師に注意されてばかりだ。自分の大変さは見せず明るく子どもに寄り添ういい先生。

生徒指導担当で部活動の責任者の古権沢は、生徒にも先生にも恐れられている理不尽な言動も多い先生。自分が絶対に正しいと考え周りに押し付ける古権沢に、須貝と放送部は目をつけられてしまったから大変だ。

みさとのクラスの亜美は、絶対に自分が悪者にならないよう上手く立ち回る女の子。ギリギリの線から石を投げ人を傷つけることは平気なくせに、反撃されると味方を集めて被害を声高く訴える。そんな亜美に以前の部活で痛い目にあわされたみさとは波風を立てないようにしていたが、葉月が爆発する。

放送部の仲間は、一年生の時からいる機材大好きな部長の古場と、明るい一年生の新入部員の珠子、野球部と兼部の新納だ。新納はみさとのクラスメイトで、いい感じの男の子。放送部存続のため自分から入部してくれた。放送部の部員はみな個性的。それぞれのキャラが上手く書き込まれていて読んでいて楽しい。

軽い気持ちでやっていた部活動をきちんとやりたくなるみさとと、友達を傷つけた経験から人を遠ざけていた葉月は、部活でぶつかり合いながらも心を通わせていく。そして、コンクールのために全員で力を合わせて作り上げた作品に古権沢の横槍が入るのだが、子どもなりに自分の考えを貫こうとする。部活を通して成長した5人。それぞれのこれから先を読んでみたいものだ。勿論、存続の灯りを灯してくれた生意気な弟のお話も。

最後に、私は『声は伝えるためにある。だれかを黙らせるためじゃない』という新納の言葉が大好きだ。大きな声や集団の声が正しいことのように人を押し込め込むことも多いけれど、声はお互いの気持ちを伝えあい理解するためのものであって欲しい。学校でも、職場でも、家庭でも。

### 参加者の感想

- ・読みやすい本。
- ・キャラクター作りが上手く、好きなキャラクターを見つけられる物語。
- ・過酷な中学時代。救いは仲間。クラブ活動は社会に出て行く人間関係の基礎かも。
- ・重い問題もあるが、子どもなりに解決していく姿がきちんと描かれる。
- ・先生たちのパワハラ。そんなところを新人先生は子ども達に見せないけれど、それなりに伝わってくる。
- ・あーこんなこともあったなと思いながら読むのも楽しかった。
- ・声は伝えるためにある。誰かを黙らせるためじゃないという文章や、詩の朗読部分がキラリと光って何度も読みたくなる。
- ・個性が強いが憎めない放送部員に比べて、クラスの亜美たちと生徒指導の古権沢は最後まで憎々しかった。
- ・須貝先生、最初は頼りがいがなさそうで不安だったが、実際は生徒に寄り添ってくれるいい先生だった。
- ・最初と最後を比べると、成長したみさとに勇気づけられた。

(R. S)